

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：32501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590118

研究課題名(和文) Macro Practice Research Questions What Social Work Is-Curriculum design by Sri Lankan Buddhist monks

研究課題名(英文) Macro Practice Research Questions What Social Work Is-Curriculum design by Sri Lankan Buddhist monks

研究代表者

秋元 樹 (Akimoto, Tatsuru)

淑徳大学・アジア国際社会福祉研究所・教授

研究者番号：20167844

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000 円

研究成果の概要(和文)：スリランカの一定地域の仏教寺院(約四百)の悉皆調査を通し、上座部仏教においてソーシャルワーク類似の活動が広く多様に行われている実態が把握された。これらデータは、仏僧に西洋ソーシャルワークとは異なる仏教ソーシャルワークの教育訓練を提供する新設大学のカリキュラムデザイン・運用に貴重な貢献をする。

マクロレベルPBR (Practice-based Research; 実践に基づく調査研究)において議論されるべき論点として、(a) 外部要因の介在、特にニーズ(調査研究の目的・ゴール)自体の変容への影響、(b)実践現場・実践家の関心・意思・選択の尊重、これらによる調査研究としての科学性の限界等が抽出された。

研究成果の概要(英文)：A census-type field research of Buddhist temples (400) in several sub-districts in Sri Lanka found the fact that various social activities similar to Western-rooted professional social work had widely prevailed among Theravada monks. The obtained data and information are utilized for the curriculum design and operation of a new university which provides monks with the education of Buddhist social work which is different from Western social work. The whole research process found such surmative general themes to discuss in the macro-level PBR (Practice-based Research) as (a) external disturbances and especially their relation with the shifts of needs (research purpose/goal), (b) the respect of practice/practitioner's interest, will and choice and its disturbance to scientificness. (Rigorousness, etc.).

研究分野：国際ソーシャルワーク、労働ソーシャルワーク

キーワード：仏教ソーシャルワーク カリキュラムデザイン マクロレベルPBR プラクティスベーストリサーチ スリランカ

1. 研究開始当初の背景

(1) 国際ソーシャルワーク学校連盟(International Association of Schools of Social Work; IASSW)・国際ソーシャルワーカー連盟(International Federation of Social Workers; IFSW)によるソーシャルワークの国際定義改定の流れの中で、アジアを中心としてその西洋専門職ソーシャルワーク(Western-rooted Professional Social Work; 以下 WPSW という)モデルへの疑問が出され、本研究代表者は「(専門職)ソーシャルワークとその機能代替」「アジアにおけるソーシャルワークの国際化」「同インディジナイゼーション」等の一連の調査研究を主導してきた。その中で、「仏教とソーシャルワーク」への関心がベトナム、スリランカの二方向から出され、後者からは仏僧にソーシャルワーク教育を提供する仏教宗教省立の大学設立の提案がなされた。

(2) 実践に基づく調査研究(Practice-based Research; 以下 PBR という)への関心が広がる(Epstein 2001)中で、議論がミクロ中心となっている現状に鑑み、第3回実践調査研究(Practice Research)国際会議(ニューヨーク)においてマクロレベルのPBRについての報告をするよう本研究代表者に招請があった。

2. 研究の目的

(1) 上記「1. 研究開始当初の背景」記載の省立大学(仏僧ソーシャルワーク教育学院)のためのカリキュラムをデザインする。その背後には、WPSWの内容とこれによるソーシャルワーク独占への異議申し立てがあり、ソーシャルワークとはなにかの問いがある。WPSWのコピーでない世界に通ずるソーシャルワーク構築への素材の提供である。

(2) マクロレベルにあってPBRを意識的、実

験的にテストし、その妥当性、適応可能性を探るとともに、マクロレベルPBRの議論において論ぜられべき論点のいくつかを抽出する。

3. 研究の方法

(1) 仏教寺院、僧侶が行っている“ソーシャルワーク”(WPSW類似活動)の実態を知る(Fact-finding)ためのセンサスタイプの実態調査(フェーズⅠ)とその結果および他の既存調査研究データ/情報、WRSWカリキュラムを参考に議論を通してカリキュラムデザイン(フェーズⅡ)に導く。

(2) 前者(センサス)は中西県(North Central Province)、アヌラダプラ郡(District)、ポロナラワ郡内の一定地区(sub-districts)内のすべての寺院、尼寺についてはアヌラダプラ郡内のすべての寺院、計約400を対象とし、2015年3月1日~12月28日に行われた。僧侶とNGOスタッフのペアがすべての寺院を訪れ他計式聞き取り調査を実施。後者(カリキュラムデザイン)は主に研究者(研究代表者)による小レクチャ、実践家(仏教ソーシャルワークプログラム導入に関心を持つ僧侶、NGO活動家、現地大学教員ほか)によるワークショップ、ブレーンストーミング、ディスカッションによった。

(3) すべてのプロセスにおいてPBRの原理と精神を最大限生かし、スリランカ現地実践家の意思と選択を尊重しつつ調査研究の多くの部分を彼らの手に委ね、日本にある大学調査研究専門家たる本調査研究代表者はコンサルタント、アドバイザーの役に可能な限り徹した。

4. 研究成果

(1) ニーズの精緻化

実践家によって当初表明されたニーズ（調査目的/ゴール）は仏僧に WPSW の教育訓練を施すことであったが、初期のワークショップ、ブレインストーミング、ディスカッションにより WPSW ではなく自らの経験と蓄積による仏教ソーシャルワークの教育訓練を行うこととなった。

（2）センサス調査の結果（例）

上座部仏教にあっては関心の中心は自己の悟りであるといわれているが、ほぼすべての寺院にあって“ソーシャルワーク”に従事する僧侶が存在した。

その活動分野は、施薬、孤児、身寄りのない高齢者、貧困解消、災害救済、水の浄化、腎臓の献体；カウンセリング/心理的癒やし、伝統医療、医療巡回、刑務所訪問、水利・種の配布、村の社会開発、学校/大学での教授その他に及ぶ。

活動は各僧侶ごとに為されており、他寺院/僧侶との協働、ネットワーク等はほとんど見られない。

これら活動に従事する僧侶の学歴は相当に高い（90%学士レベル、20%修士レベル）。

僧侶のソーシャルワーク教育訓練を求める需要は相当に高い（62%仏僧、88%尼僧）。

（3）カリキュラムのデザイン

調査研究のそれぞれの場では逐次議論は成されたが、当初計画された上記センサスデータに基づくカリキュラムのデザインは、下記(5)の事情により未だ実現していない。ただし、初期に省立学院ディプロマ向けのものは研究代表者のコンサルテーション/アドバイスを得て実践家サイドでデザインされている。

コアカリキュラム

1. 歴史と現状
2. 哲学、規律(disциплиnes)、教え、なぜ我々はするのか？

3. 仏教と科学

4. 内面の要素、実践家の心の内、実践家とクライアントの関係；慈悲、他利、思いやり(care)、親切心(charity)その他

5. 倫理と中核的価値(concepts) すべきこととすべきでないこと

6. 相談とカウンセリング

7. 方法と技術 個人・集団・組織・村/コミュニティ・社会の各レベル；相談とカウンセリング、組織運営、コミュニティの組織化、社会開発その他

8. 施策(program)/事業(project)の管理運営；計画、モニタリング、評価

9. 政策と施策 仏教人、政府、NGO その他

10. 調査法とフィールド調査；質的調査、量的調査、プログラム評価、調査研究に基づいた実践と実践に基づいた調査研究

11. 産業化とグローバリゼーション；前近代、近代、ホストモダン

12. 実習

主な特徴は以下の通り：

- a) 仏教の哲学、中核的価値、原理その他に根ざし、WPSW のそれら（個人主義、キリスト教、近代主義、人間中心のヒューマニズム、科学至上主義等）に根を置かない。たとえば、人間と自然の間の親密性、社会問題の背後に人の側のファクターを見る（強慾、利己中心主義等）、内面（慈悲、無私無欲等）の重視。
- b) それぞれのコースは原則としてサンドウィッチモデルを採用する。WPSW のコピー教育からはじめず、仏教実践の蓄積とレビューの中からはじめ、後半の一部のセッションに必要な応じ WPSW からのレッスンを入れ、最後の数セッションは仏教ソーシャルワークに戻る。
- c) 調査コースでは PBR を意識化する。データは調査コースの教育のためのみならず、プログラム運営、フィールドワークの管理のためのデータベースとする。
- d) 実習は雨期（僧侶は寺院を空けない）の 3

ヶ月に指導者との一対一の関係で実施される。

(4) PBR の理解

本調査研究は PBR といえるか？

PBR の定義は明らかではないが、そのエッセンスを(a)調査研究のテーマは実践の中のニーズから生まれたものであり、よって(b)調査研究の結果/発見は研究者の「業績リストを豊かにする」に留まらず間違いなく実践に還元される、さらに(c)調査研究の全プロセスは実践家と研究者の共同作業によって行われ、実際に調査研究を中心に行うのは実践家であり、(d)研究者の主な役割はコンサルテーション（相談・アドバイス・コーチ等）に限定され、よって調査研究の実施は現場の調査研究能力を高めることに貢献する（Epstein 2001；cf. 秋元 2006：42）と理解するならば、その回答は Yes である。

実践調査研究（Practice Research；以下 PR という）内における位置
ソーシャルワークの分野において特にこの 10 年ほど PBR に類似する PR の語が広がっている。（cf. 2008 Salisbury, Helsinki, and New York Statements）これとの関係が議論/整理されなければいけないが、PR の定義もまた多様であり固まっているとはいえず、進んでいない。（Uggerhoj 2013）一方の極に伝統的研究主導調査、他方の極に実践家による調査を置き、その間に相互の共同作業の程度によりいろいろな PR モデルが配置される。本調査研究は相当に実践家による調査に近い位置にある。

PR の比較的オーソドックスな定義をあげるならば以下のものであり、本項 の PBR 定義と親和性が高い。

Practice research originates in the concerns of practice and develops practice-based solutions. It uses a collaborative, developmental approach that respects the knowledge held by practitioners and

engages practitioners in research process.

<The five practice research tests>1. Does the research address a problem identified by practitioners? 2. Is it based on collaboration with practitioners? 3. Does it respect practitioners' knowledge? 4. Does it develop practitioners' skills and knowledge? 5. Will the outcome work in practice? (Fisher 2017)

アクションリサーチとの異同/関係についても同様に俎上には上がるが真正面からの議論整理はまだない。

(5) マクロレベル PBR において論じられるべき点

本調査研究が Practice-based であることは間違いない。しかしそれは Research といえるか？その意味で PBR といえるか？現在上記 PR を論じるグループは調査研究(research)を Knowledge production と定義している。もし、Knowledge を「ハウツー」レベルから理論(theory)構築までを含むものと理解すれば回答はイエスとなるが、もし異なる定義を与えるならば回答はノーとなり得る。たとえば全プロセスにおいて方法論的に「科学的である」(validity, rigorousness; RCTs (randomized-controlled trial studies))ことを求めるならば回答はノーとなる。Practice-based practice とすらいわれうる。三点のみ取り上げよう。

第 1 点はフェーズ間の問題である。マクロプラクティスは多様であるが、ほとんどの場合、複数のサブプラクティスたるエレメントまたはフェーズの複合体として成り立つ。各サブプラクティスのリサーチにあっては十分に科学的であったとしてもそれらを結びつける接点においては科学性を保証するのは難しい。本調査研究にあっても然りである。

第 2 点は外的要因の介在の問題である。本調査研究にあってはこれが繰り返し見られ

た。a) 政府による省立学院開講の突如のプログラム前倒し要求、b) 現職大統領の予想外の選挙敗退とこれに続く首相、大臣ほかの交代、国会総選挙、予算の凍結と再編によるプログラムの遅延とキャンセル、c) 伝統的既存仏教大学への移行決定、教員に対する宗教コード故のキャンセル、d) 新設私立国際仏教大学内への編入の決定等。外的介入要因はニーズ、各プロセス、結果の利用のそれぞれにおおきな影響を与える。

ここではニーズとの関係についてのみ述べる。外部要因の介入によってニーズ(リサーチの目的/ゴール)そのものが変化する。上記

a)~d)のたびごとに、そもそもの調査研究ニーズが消滅し、変化/変容(e.g. 異なるプログラム用となる)し、再生する。もともとがフォーマティヴ・リサーチであったものが次々とその調査研究対象が代わってしまっている。調査研究の継続自体は当該実践家の関心と熱意による一種の goal displacement である。

第3点は実践および実践家の意思・自立性・独立性の尊重である。本調査研究の実践家は強い自立心、自信、プライド、能力、関心を持ちあわせる。それぞれのアドバイスも彼らが思う要点のみを即座につかみ、調査票設計、サンプリング方法、フィールド調査の実行可能性等々具体的技術的ステップについては必ずしも十分に耳を傾けない、あまり関心を払わず、猪突猛進する。

(6) なぜ PBR を選択するか？

実践及び実践家に対する敬意、その参加共同作業による調査研究の質の向上といった上記 PBR、PR の利点に加え、唯一これ以外の選択はないという消極的理由もある。たとえば本調査研究にあっては、外部者はフィールド調査者として受け入れられない、またはデータ収集が難しい。言語問題のみならず、調査対象(僧侶)の持つ文化その他の特

性によるところも大きい。調査現場とコンサルタント・アドバイス研究者との地理的距離のファクターも大きい。

PBR はある種のマクロレベル実践及び途上国援助プログラムにとっての汎用的調査研究モデルであるか、あるいは不可能モデルであるか？との問いに一般的結論を下すには、これからの長期にわたる実験的調査研究の繰り返しが必要であろう。

<引用文献>

秋元樹、「解説」アーウィン・エプスタイン、秋元樹訳「“実践に基づいた調査研究”における既存臨床情報の利用 - 金を夢見つつ銀を掘る - 」『ソーシャルワーク研究』、Vol.32. No.1 & 2. 2006. 42-48 & 38-43.

Epstein, Irwin. 2001. "Using Available Clinical Information in Practice-Based Research: Mining for Silver While Dreaming of Gold." *Social Work in Health Care* (Haworth Social Work Practice Press) Vol.33 No.314. 15-32.

Fisher, Mike. 2017. The definition of Practice Research in his handout in the Workshop: Practice Research in Action in the fourth International Conference on Practice Research. Hong Kong.

Lars Uggerhoj, Aalborg University, 2013, "What is Practice research in social Work—Definition, Barriers and Possibilities." *Social Work and Society International Online Journal*. Vol.11. No.1

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

The application of practice-research at the macro-level in social work: How Much Must PBR Be Practice-Based? The Shift of Practice Need and External Disturbance--A study on curriculum design by Sri Lankan Buddhist monks. The 4th International Conference on

Practice Research. 2017 年 5 月 23 日、香港(中国)

The Application of Practice Research at the
macro-level in social work: A Study on
Curriculum Design by Sri Lankan Buddhist
Monks--design and redesign--The 3rd
International Conference on practice Research.
2014 年 6 月 10 日、ニューヨーク(アメリカ)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

秋元 樹 (AKIMOTO, Tatsuru)

淑徳大学・アジア国際ソーシャルワーク
研究所・特任教授
研究者番号：20167844

(2) 研究協力者

Anuradha Wickramasinghe

SFFL(Small Fishers Federation Lanka)・代表

Chandana Kodituwakku, Jayathilake Perera,
and Ponweera Arachchige Sidni Malan
Appuhami

SFFL(Small Fishers Federation Lanka)・スタッフ

Mihintale Seelarathana

ミヒンタレ僧侶

M.H.D.R. Herath

Peradeniya University・社会学部・教授